

鼻黒稲荷 なぜ鼻黒なのか



遊行通りを藤沢橋方面に向かって歩くと左手によく知られた蔵前ギャラリー（旧榎本米穀店の石蔵）がある。この辺りはかつて蔵前といい、凶作に備えて米などの穀物を境川を使って集められ蓄えた郷蔵があったことによる地名である。お店の前から右に曲がる道があり大正橋に出るが、その手前に赤い鳥居のある鼻黒稲荷大明神があり小さな朱塗りの小堂がある。ここは相模国準四国八十八箇所第六十番札所で日照山金剛院（廃寺）といい、金剛院はもともと別な場所にあったが火事に遭い廃寺となって、大師像だけが此処に移転して来たという。

鼻黒稲荷はもう一ヶ所、藤澤橋と 467 号線旧東海道との交差点、（藤沢 693）に金砂山（きんささん）観音堂にあり五十八札所である。「金砂山安産子育観世音」と刻まれた石碑のほか、青面金剛像を彫った庚申塔など数基の石造物がある。石段を上る前に謂れを書いた緒言がある。それによると、「寛永年間に金井清西が建立、その後、天保年間に梶某なる者が再築、子育て、安産、帯解きの観音として賑わったが、明治の廃仏毀釈で観音像は遊行寺末寺真浄院に移転したとある。その後、お堂が建てられ、大正 12 年の震災で倒壊したが修復され今日に至っている」とのことである。鼻黒稲荷のことについては触れられていない。



鼻黒稲荷大神には家内安全の旗が立っていた。中を覗くと大師像はないようだった。お堂の前には、藤沢山遊行六十五世尊光上人の書になる、関東大震災当時の供養塔があり、「嗚呼九月一日」と刻まれ、裏には藤沢町民 116 名の名が刻まれている。(このことについてはHP 「Y R・四季の道」寄り道コーナー70 で触れた。参照)

鼻黒稲荷、なぜ鼻黒なのか、謂れを知りたくなる。ネットで調べてみると藤沢の 2 件しかヒットしない。藤沢宿に詳しいウォーキング協会の吉田厚治さんにお聞きすると、「往時、藤沢宿の旅籠の半数以上には飯盛り女がいた。表向きは給仕だが裏では男の相手をし、その中には梅毒持ちもいたでしょう。梅毒が進行すると鼻が欠けると言われます。このことに由来するのではないかでしょうか」とのことであった。

ネットで調べると梅毒の末期には鼻が欠けたりする症状になる。しかし、梅毒は藤沢宿に限ったことではなく全国的に分布していた筈だ。なぜ鼻黒稲荷があるのは藤沢宿だけにあるのかは依然として分からない。

さて、梅毒の起源は 1492 年、意欲に燃えるコロンブスが新大陸からもたらされたとするコロンブス説が有力である。その後、バスコダガマのインド航路の発見によって、南蛮人や和寇によってインド、東南アジア、中国、朝鮮半島、琉球へ梅毒は伝播した。それは 1543 年の種子島鉄砲伝来以前のこととされる。伝染の経路は人骨の発掘によって明らかになるが、ヨーロッパとアジアとの交流の歴史、侵略の研究でもある。(八柳 修之)

参考文献：「藤沢史跡めぐり」 藤澤文庫刊行会編 「藤沢の地名」 日本地名研究会 図書出版
Wikipedia 鵜沼を語る会 HP